（読売新聞）2015.7.6
（第3種郵便物認可）

島再生 農業に託して

尾道市の離島・百島にある「百島農園」の藤田武士社長(76)。ハウスを使った施設農業に取り組み、Iターン者の受け入れなどで、過疎、高齢化が進む島の活性化を目指す。

ふるさとあしたへ 備後

「百島農園」社長 藤田 武士さん 76 （尾道市百島町）

――百島は、尾道市中心部や福山市西部から、船で片道約10～50分。周囲約11キロの小さな島で、コンビニエンスストアはもちろん、島内に信号機もない。5月末現在、人口531人で、高齢化率は約69％。市全体（約33％）の2倍を上回る。藤田社長は2000年春に退職後、Uターンし、同年秋に農園を開いた。

中学まで島暮らし。本土の高校を卒業後は、大手電機メーカーに就職し、全国を回った。就職先に向かう際、母や祖母が、島を離れる船に手を振って送ってくれた。島外での生活で、嫌なことがあっても、その時を思い出して頑張った。

しかし、定年を迎える頃、帰省すると、農地は雑木に覆われ、実家の畑の一部も耕されず放置されていた。古里が荒れる姿に心が痛んだ。人口も年々減っていて、いつかは無人島になり、地図から百島が消えるのではないかという危機感があった。人が増えるように事業を興すことが、古里への恩返しだと考えた。

――県内生産量が少なく、輸入農産物にも対抗できる作物をと、イチゴに注目した。

イチゴの苗を手入れする藤田さん（尾道市百島町で）

島の高齢者が作業しやすいよう、栽培施設も工夫する。

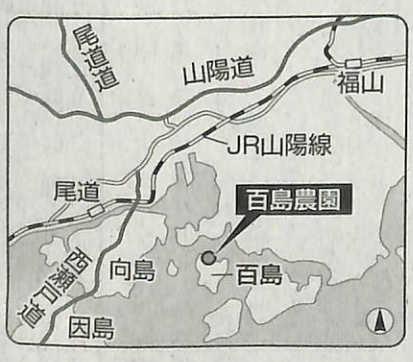
高齢者が膝や腰を曲げてしゃがむのは大変。立ったまま作業できるように、ハウス内の栽培棚は腰の高さ。肥料や水やりはコンピューター制御で、タッチパネル式の装置で管理している。鮮度で勝負するため、近隣の福山、尾道、三原市内のスーパーや洋菓子店だけに納入している。

――現在、農地1㌶に25棟のハウスを設けている。東京や大阪、神戸などから移住した30～50歳代の5人が、栽培技術の習得に励む。

ハウスごとに栽培を任せている。担当するハウスで良い作物が多くでき、売り上げにつながれば、ボーナスに反映する。ハウスのイチゴは収穫が秋から春なので、年間を通じて収入を得られるよう、コマツナやホウレンソウなども栽培している。2、3年で技術を身につけ、農業で年収500万円を目標に、島内で独立してもらう。

――百島は宿泊施設が乏しく、気軽に島外から訪れ、島の雰囲気を知ることは難しかった。

企業の元保養所を借りて、体験者が宿泊できるようにした。研修生には空き家を紹介している。しかし、島では、水が井戸水だったり、水洗トイレもなかったりするなど、本土で当たり前の生活基盤がないことも多いので、給湯器を付けるなど、できるだけ環境を整えるようにしている。



――島の生活は、住民に溶け込む努力も必要になる。

狭い島で、昔からの知り合い同士なので、新たに移り住んだ人は少し距離を感じるかもしれない。「誰にでもあいさつする」「料理を作ったら近所にお裾分けする」といったアドバイスをしている。続けていれば、笑顔で受け入れられる。若者の移住は〝奇跡〟に近い。頑張る姿は、高齢者の励みになっている。

――将来は、民泊で、島外の子どもを受け入れて、農業などを体験してもらい、第二の古里と感じてもらう構想を練る。

若い頃は故郷が離島ということを引け目に感じ、百島出身と言えなかった。今もそんな思いを持っている島民もいるかもしれない。でも、移住者が農業で活躍し、子どもも頻繁に訪れるようになれば、古里を誇りに感じると思う。若者を呼び込み、島を存続させることが、過疎地の手本になると思う。

（佐藤祐理）